

消化器内科での最後の1年を振り返って

消化器内科 安藤 朗

2020年初頭から世界を襲った新型コロナウイルスパンデミックもどうにか収まり、以前の日常が少しずつ戻りつつあることを嬉しく思っています。しかし、コロナウイルスに翻弄されている間に3年半が過ぎ来年の春には定年退職を迎えます。約9年半前に教授に就任したときにこれだけは実現しようと思ったことが2つありました。

一つは自分が教授の間に血液内科を講座として独立することです。かなり以前より大学側と折衝を重ねていましたがなかなか話は進みませんでした。ところが、現在の上本学長は非常に前向きに対処いただき2022年10月から血液内科初代教授として村田誠先生をお迎えすることができました。すばらしい教授をお迎えできたことを非常に嬉しく思っていますが、村田教授にはたいへんなご苦勞をおかけすることとなり少し申し訳なく思っております。血液内科の教室の立ち上げに当たり小生が現役のうちにできる限りの協力を惜しまないつもりです。

もう一つは、消化器免疫分野の研究の総まとめになるような成果をだすことでした。腸内細菌研究やチオプリン代謝にかかわるモデルマウスにおいてはそれなりの成果をあげることができましたが、大学院生の減少や臨床が多忙を極める状況でここ数年は思ったような成果はでていません。今後の成功と発展に期待しています。大学の教官の大切な使命は、一般の病院ではできない研究活動を通して後輩を指導しその成果を論文としてまとめることです。指導を受けた後輩はまた同じことを次の世代に伝えてくれることでしょう。今の消化器内科ではこのプロセスがほとんどできていません。教授として、つよく今後改善されることを期待しています。

残り半年、血液内科のさらなる充実への協力と残されたデータを論文にまとめることに集中して大学での生活にピリオドを打ちたいと思います。消化器内科教授の選考が始まりつつありますが、消化器内科の次の世代の発展を祈念しております。